世阿彌

山崎正和

新潮文庫

支援

良一記念文庫

法人日本科学協会

世　阿　彌

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 170 A

昭和四十九年十二月十五日 印刷
昭和四十九年十二月二十日 発行

著者　山崎正和

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊀ 印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Masakazu Yamazaki 1974　Printed in Japan

新潮文庫

世阿彌

山崎正和著

新潮社版

2229

目次

世阿彌……七
野望と夏草……二七
解説　黛哲郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

世

阿

彌

阿弥陀世

四幕とエピローグ

時　一応、応永十五年の四月から永享四年の八月まで、およそ二十五年にわたるものとするが、歴史上の日づけは随時無視されている。

所　世阿彌、四十六歳から七十歳までに当る。

洛中。鹿苑院の外庭と、世阿彌の居宅、及び街路

人物

世阿彌元清　世阿彌の長子

観世十郎元雅　世阿彌の次子

元能　世阿彌の妻

椿　三代将軍（声のみ）

足利義滿（鹿苑院）　四代将軍、義滿の長子

足利義持　義持の異腹の弟

足利義嗣（新御所）　義滿の側室、世阿彌の恋人

葛野の前

管領、細川氏

侍所所司、赤松氏

三条公忠卿

大江望房卿

巫女の老婆

鉢叩きの老爺

ささらすりの男

鳥刺しの青年

萩　白拍子

桔梗　萩の娘

楓　桔梗の娘

道阿彌（犬王）

音阿彌　世阿彌の甥

北面の武士

幕府の使者

幕府の役人

その他、義滿、義持、葛野、役人

などの侍者　多数

刺客　二人

踊りの人々、男女多数

第一幕

応永十五年、ときは四月、ところは足利義満の営む北山第の外庭。といっても写実的な建造物などむしろ目障りである。ただ白と紺の市松模様の障壁と、金色に輝く数本の柱とが、適宜組みあわされて背景を埋める。

正面に数段の階段があって、回廊の中門のようでもある。

桜が満開。花房を洩れる光が舞台一杯に氾濫して、人の顔を上気させて見せる。下手よりに豪華な牛車が、これまた考証を離れた装いで、ひっそりと御簾を降ろしている。その傍らには恐ろしく逞しい侍者が一人、薙刀を片手に終幕まで佇立している。

幕があがると、上手よりに、歩き巫女の老婆、鉢叩きの老人、ささらすりの中年男（いずれも乞食芸人）が醜怪な姿でたむろし、やや離れて、鳥刺しの若者と白拍子の娘とが寄添って坐っている。

鉢叩き　なまぐさい。風がなまぐさい。また人が死ぬ。

ささら　西では侍の戦さがある。東では百姓の一揆がある。血なまぐさいのが珍らしいか。

鉢叩き　いや、確かに今の風は、このお屋形の内から吹いた。

ささら　とかく花を吹く甘酸い風は、死人の匂いのするものよ。

鉢叩き　なるほど。してみりゃ花の御殿のこの北山第、死人の匂いでむせ返る道理だ。おい、観

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

世大夫の天覧猿楽はもう終ったか。

ささら　終る頃じゃ。

鉢叩き　きょうござるのは誰々じゃ。

ささら　死にばえのする人に事は欠かぬわ。今上の帝を始めとして、太政大臣義満公、征夷大将軍義持公、それに新御所義嗣公と役者が揃うたわ。

鉢叩き　帝は別じゃ。あれは生きながらの骸同然。すると、おい、足利の親子三人、めでたい猿楽を眺めながら、一人は亡者の数にはいったか。

ささら　のう婆ア。誰だ。巫女なら云えようが、今度死ぬのは誰じゃ。

鉢叩き　よせよせ。巫女のお告げはせがんでも無理よ。

ささら　では爺イ、賭けるとしよう。わしは、命のないのは義嗣公と見たぞ。痩せても枯れても義持は将軍だ。腹違いの弟を生かしておく道理がない。

鉢叩き　こっちは逆だ。天下の義満公お気に入りの義嗣様じゃ、かりそめの将軍など木ッ端微塵よ。

ささら　賭けるか。

鉢叩き　賭けたぞ。

ささら　賭け物はなんだ。

鉢叩き　この印籠はどうだ。この間の近江の一揆で、殺された侍が身につけておった。そっちは

なんだ。

ささら　蒔絵の笄はどうじゃ。おとといの土倉破りを加勢して、奥方の髪から引き抜いて来た。

鉢叩き　賭けたぞ、義持じゃ。

ささら　はったぞ、義嗣に。

鳥刺し　うるさいやい。人殺しは、まじめな稼業にするもんだ。爺さん達みたいに横から眺めて楽しむもんじゃないわ。（立つ）おい萩、小唄でも歌え。

白拍子　ふん、祭でもないのに、歌えば、何をくれる。

鳥刺し　何が欲しい。

白拍子　稼業は鳥刺しだろ、鶯を刺しておくれ。

鳥刺し　おまえ、鶯を喰うのか。

白拍子　鶯が憎い。あれは楽しげに歌う、邪魔になる。

鳥刺し　よし刺してやろう。お前の歌の邪魔はさせぬ。だから歌え。

白拍子　（歌う。淋しいというよりはむしろ冷く）

「嫁や娘の若き人、舞ひ猿楽にはづれねば、見物好みの人ぞとて、誰も見知りて、例の者ぞと指をさす。意見さ申さうか。」

一同、「意見さ申さうか。」と唱和。

鳥刺し、竿を片手に走って退場。
鉢叩きとささらすり、手を拍って。

鉢叩き　いやまったく、当節もの見高いは女房子供ばかりではないわ。武家や殿上人が、何かというと猿楽見物じゃ。

ささら　きょうは天覧猿楽、あすは勧進猿楽、世阿彌殿も大抵のことではない。どうしてこう、人がものを見たがるのかな。

鉢叩き　誰もがおのれの姿は見とうはないからよ。惨めな世の中じゃ。おたがい顔を見あわせるのはもっと恐ろしい。そうなりゃおまえ、並んで見世物を眺めているのが一番だ。

ささら　なるほど。するとわし達藝人は、やり場に困った眼ざしの、つまり掃き溜めというわけだな。

鉢叩き　そうよ。わし達が無惨な姿でひと眼を惹いていたればこそ、かたぎの手合いはおのれの姿を忘れて暮らせる。

ささら　だがわし達はそうだとしてもだ、今をときめく世阿彌殿はどうじゃな。

鉢叩き　知らん。だがどっちみち、ひとに見られるのが稼業なら同じことよ。

ささら　とぶ鳥落すあの晴れ姿を見ていると、とてもとても、ひとの眼の掃き溜めなどとは思われぬが。

鉢叩き　思えば観世一門も大した出世をしたものよのう。親父の観阿彌殿の若い頃を知っているか。あっちの寺こっちの宮の境内で、見物と云えば町の商人や百姓ばかり。それが一代でまあどうだ、息子の世阿彌殿のお姿は、拝むことさえ大抵じゃない。

ささら　世阿彌殿、十三歳の夏のことじゃ。祇園祭の見物に義満公のお傍近くはんべったあの晴れ姿。水もしたたる稚児ぶりに、都中の女どもが眼ひき袖ひきしあったもんじゃ。

鉢叩き　女どもではあるまい。誰より眼を細うしたのは義満将軍御自身じゃ。才は走るし、姿はいいし、だからのう、萩。（卑しく）夜のお伽ぎをつとめるのも、どのお側女より、世阿彌が一番じゃったというぞよ。

白拍子　いやらしい、聞きたくない。

ささら　（笑って）お稚児さんなら仕方があるまい。そのおかげで猿楽が、ここまでめでとう栄えたのじゃ。それにな、世阿彌殿は姫君方にも、けっこう慕われていい御身分だ。な、萩。おまえ聞いたか、世阿彌殿はつい近頃、また新しい女性に懸想したというぞ。

白拍子　珍らしくもない。世阿彌殿の女出入りは始終のことだ。

ささら　それが今度のは、格別にやんごとない姫君だそうな。へたをすると世阿彌殿、今度こそ命とりにもなりかねぬということじゃ。

鉢叩き　あの男はいつも高貴の姫にしか手を出さぬ。

白拍子　そしてすぐ捨てる。小気味がいい。

ささら　おい、おまえ、世阿彌殿に気があるのではなかろうな。（哄笑する）

鳥刺し、竿に鶯を刺し、片手には桜の小枝を持って戻って来る。

鳥刺し　鶯を刺して来た。さ、もひとつ歌え。

白拍子　ふん。（あらあらしく桜の小枝を奪うと、一握の花房をむしり取って、それを撒き散らして歌う）

「鶯刺して嬉しやな、花は散らせて嬉しやな、三千世界に火を放ち、この身ひとつが、鳥ぞ花ぞと舞ひ狂ふ。意見さ申さうか。」

ささら　意見さ申そうか。（笑う）恐ろしい女子じゃ。三千世界に火を放ちおのれひとりが舞い狂おうとか。さようにおのれが強うては、とても極楽往生はかなうまいぞ。

白拍子　（立つ）ふん、どうせ歩き白拍子、非人の娘に行ける極楽があるものか。せめてこの世にある限り、ひとにおのれを見せて見せて、舞い狂うて死んで見せる。

狂おしく花をむしっては投げながら、白拍子は、舞い、歌う。

次第に一同唱和する。

「鶯刺して嬉しやな、花は散らせて嬉しやな、三千世界に火を放ち……」

その時、奥に声あり。

声　将軍家、御退出。

正面より武士達数名登場、階段の両脇に控えると次いで、管領細川氏、侍所所司赤松氏、将軍義持登場。白拍子のほかは、さすがに一同鳴りをひそめる。

白拍子　みんな見ておくれ。北山第のお庭で萩が舞う、征夷大将軍のお供先で。

鳥刺し　おう、俺が見てやる。萩、舞い狂え。

白拍子　（激しく舞う）三千世界に火を放ち、この身ひとつが……

彌　赤松氏、侍に合図して叫ぶ。

阿　赤松　無礼者、ひかえよ。

世　侍、娘を突き倒す。

鳥刺し　何をする。

赤松　非人の身でお屋形をうかがうさえ恐れ多いのに、御前であさましい踊り、もってのほかだ。

義持　（細川に）この者達はなんだ。

細川　これは七道の者と申し、卑しい藝をひさぐ非人どもでございます。

義持　父上のお屋形にどうしてこういう者達がいるのだ。

細川　存じませぬ。多分、赤松殿のお好みでございましょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton